# 岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/

2017. 9 No. 154



**目次**／テーマ展　中世の南部氏と糠部　表紙／いわて文化ノート　発掘調査から見えてきた閉伊の古代～中世鉄生産**p.2-3**／展覧会案内　テーマ展「中世の南部氏と糠部」**p.4**／事業報告　ゴールデンウィークスペシャルイベント**p.6**／事業報告　県博バックヤードツアー**p.7**／インフォメーション**p.8**


テーマ展

## 中世の南部氏と糠部

**2017年9月23日(土)～11月26日(日)**

**向鶴銅製品**

国史跡聖寿寺館跡出土（南部町教育委員会蔵）

短径1.4㎝、長径2.6㎝、厚さ４㎜、重さ4.8㎏

向鶴紋は江戸時代の南部氏の家紋として知られています。これまで中世における向鶴紋の使用例は未確認でしたが、15世紀から16世紀前半にかけての三戸南部氏の居館・聖寿寺館（青森県南部町）の発掘調査により、この「向鶴銅製品」が出土しました。サイズは長い部分で３㎝弱と非常に小さな資料ですが、中世の三戸南部氏の歴史、家紋の誕生や展開を考える上で非常に貴重なものと言えます。

■いわて文化ノート

# 発掘調査から見えてきた閉伊の古代～中世鉄生産

学芸第一課長　小山内　透（考古部門）

岩手県は、近世から続く「南部鉄器」や世界遺産に登録された近代製鉄の始まりである橋野高炉跡、そして現代に至る釜石市の製鉄産業と国内でも著名な鉄生産地として知られているところです。

近世以降の鉄生産については、文字資料なども残っていて、ある程度、様子を窺い知ることもできますが、古代から中世にかけての文字資料は皆無です。また、北東北で発掘調査された製鉄遺跡は、青森と秋田両県とも10遺跡程度、岩手県ではこれより少なかったことから、製鉄遺構の構造と技術の変遷について、ほとんど解明されていませんでした。

平成になって以降、県内では、山田町以北で、三陸国道などの大規模開発に伴う発掘調査が増加し、近年では復興関連調査が多数行われたことにより、閉伊地方において鉄生産関連遺跡の発見が相次ぎ、徐々に様相が見えてきたところです。

未報告の遺跡も多く、現時点では暫定的なものとなりますが、垣間見えてきた閉伊地方の古代～中世の製鉄遺構の構造と変遷の傾向を概観したいと思います。

**■製鉄技術の導入期**

日本での製鉄の始まりは、発掘調査成果からは、古墳時代（６世紀代）に、朝鮮半島から中国地方を中心とする西日本に技術が伝わったと考えられています。

導入期の原料は、鉄鉱石が用いられていましたが、砂鉄との併用期を経て、古代以降は砂鉄が主流となりました。初期製鉄炉の構造の具体は不明ですが、基礎となった朝鮮半島での様子から竪形炉であったろうと推察されています。

**■製鉄技術の伝播**

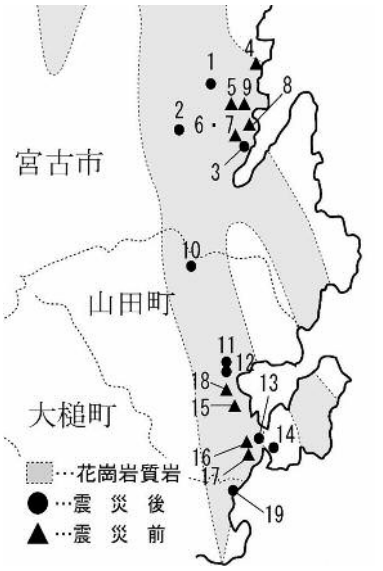
７世紀後半以降には、東日本にも製鉄技術が広まり、東北では、南東北の福島県沿岸北部から宮城県沿岸南部で、官営工房的規模の製鉄遺跡が、多数発見されています。この地域での普及時の製鉄炉は、中国地方で６世紀後半以降に発達した箱形炉が主体でした。８世紀後半以降には、新たに竪形炉が導入され、一時併存する状況となりますが、平安時代（９世紀）以降は、東日本では竪形炉に主流が移行していくことが判明しています。

北東北での製鉄の開始は、調査事例から、竪形炉による９世紀後半以降と考えられていましたが、県内では、近年、山田町の間木戸Ｖ遺跡で検出された製鉄炉が、排滓場出土の土器からみて８世紀後半に遡る可能性もでてきました。

**■岩手の古代以降の製鉄遺跡**

これまで県内で発掘調査された古代から中世の製鉄遺跡は、内陸部では花巻市の大瀬川Ａ遺跡（平安時代）の１例のみで、出土鉄滓（てっさい）と掘り込みの状態から平地式の竪形炉と推測されます。

沿岸部では20を超える遺跡の調査が行われ、ほとんどが閉伊地方、特に山田町と宮古市に集中しています。沿岸部に製鉄遺跡が多い最大の理由は、原料となる砂鉄資源が豊富なことで、砂鉄を含む花崗岩体が北上山地に広く分布することに起因すると考えられます。




閉伊地方の調査された製鉄遺跡（H26時点）

**■閉伊地方の製鉄遺跡の立地**

閉伊地方の丘陵地地形は、地殻変動による花崗岩の露出隆起とこれらが小渓流に浸食されたやせ尾根群とその谷間がネガポジ的な樹枝状となっています。

製鉄遺跡の多くは、宮古市では、閉伊川と津軽石川、山田町では、関口川と織笠川に注ぐ支流河谷や小渓流沿いで、尾根裾の狭い緩斜面に立地しています。

**■閉伊地方の製鉄遺構**

製鉄遺構は、製鉄炉、送風施設、排滓（はいさい）坑（こう）、作業場、資材置場等から構成され、関連する遺構として、燃料木炭を得るための炭焼き窯や排滓場、炉を造る粘土を取った採掘坑などがあります。

閉伊地方で検出された製鉄遺構の基本構造は、地下構造の発達以外、古代から中世まで大きな変化は認められません。

構造的には、緩斜面に３～４ｍ程度の広さの竪穴状の平場を切土造成し、平場の中央もしくは谷側に、略円形や楕円形の浅い土坑（どこう）を掘り込み炉底とし、炉前庭部には排滓坑（溝）が設けられます。

炉後背地の平場は、鞴座（ふいござ）や資材置場と考えられ、木炭や砂鉄置場として使用痕跡の確認された例はありますが、送風施設の具体的痕跡は未確認です。

宮古市　松山館跡　製鉄工房（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

平場は、二～三回拡張造成され、築炉・操業を複数回繰り返す場合が多く、家内工業的な規模の操業と思われます。

北東北のほかの二県では、炉の後背地と前面に平場を階段状に造り、炉の正面

を開口するように斜面を掘り込み、三方が地山で囲まれた典型的な半地下式竪形炉も確認されています。

並列する例も見られることから、同時操業の可能性も考えられます。時期的には10世紀代と報告されています。

秋田県　堪忍沢遺跡　５～７号製鉄炉
（秋田県埋蔵文化財センター提供）

**■製鉄炉の形態**

製鉄炉は、竪形炉と箱形炉の二系統に大きく分類されます。北東北のこれまでの調査では、箱形炉の事例はなく、すべて竪形炉の系統に属するものです。

竪型炉は、地面に穴を掘って炉床とし、炉の背後から一本の送風管で送風し、炉前庭部に排滓坑（溝）をもつものです。

箱形炉は、基本的に掘り込みのない長方形の炉で、斜面に対して横置きと縦置きがあり、両側長辺に複数の送風管（孔）を設けて送風し、横置きは両側短辺に、縦置きは斜面側短辺へ排滓しています。

いずれの製鉄炉も操業形態から上部構造は最終的に破壊されるため、発掘調査で確認できるのは、地面に痕跡として残る下部構造がほとんどです。

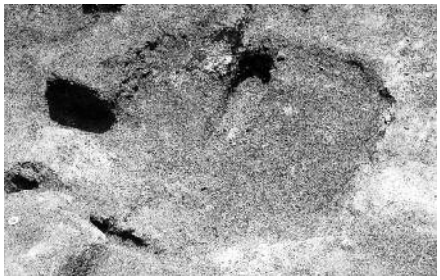
上部構造ついては、竪形炉は、炉床からの高さ１m程度の上部が窄まる円筒形状、箱形炉は高さ１m未満の開口した箱形を呈したと推定されています。

**■閉伊地方の製鉄炉**

閉伊地方の製鉄炉も竪形炉系統に属するものです。確認できた炉の大半は、炉底部と基部が残るもので、径１m未満の略円形～楕円形の碗形もしくは皿状、及び前庭部側が開くものもあり、深さは10～20㎝程度に掘り窪められています。炉形はいわゆる半地下式竪形炉に分類されるものですが、後背地丘陵斜面を掘り込んだものは確認されておらず、炉底部のみ掘り込んだ自立する円筒形の竪形炉と推測されます。

９世紀～10世紀前葉の炉は、炉底に木炭粉が薄く面的に確認されるものもありますが、基本的に地下構造は作られず、地面に掘った穴を直接炉床としています。

地下構造とは、炉内を高温に保つために、製鉄炉の地下に除湿と保温を目的として設けられるものです。



山田町　間木戸Ⅴ遺跡　2号製鉄炉跡（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

10世紀後葉には、操業後の炉底部掘り込みを再利用し、炉壁廃材や鉄滓類を埋めて築炉した地下構造的機能が確認されるものも出現します。

11世紀後半以降、築炉前の意識的な地下構造が出現します。径が1.2～1.4mの略円形で、深さ20～40㎝程度と炉体よりも一回り大きな穴を掘り、炉壁廃材や鉄滓類と木炭（粉）を充填（じゅうてん）しています。

山田町　焼山遺跡　8号製鉄炉跡（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

12世紀以降には、地下構造の掘り方を乾燥のために空焚きし、除湿・保温のための充填材は、木炭や木炭粉が主体とされるようになります。

宮古市　松山館跡1号製鉄炉地下構造（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

中世の13～14世紀前半までに、地下構造掘り方は、略円形から隅丸方形に変化し、14世紀には、炉底の掘り込みと炉床の認められない例も現れることから、円筒形自立炉への変化が窺えます。

**■閉伊地方製鉄炉の特殊事例**

９世紀前半、竪形炉と箱形炉の折衷（せっちゅう）形と報告された楕円形竪形炉で、送風管が長辺両側に複数確認されたものです。

山田町　田の浜館跡　2号製鉄炉跡（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

11世紀前半、送風管が炉の横に設置された竪形炉で、三方から送風した可能性が考えられるものです。

山田町　焼山遺跡　２号ｂ製鉄炉跡（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供）

以上、途中経過の報告となりましたが、今後は、随時報告される調査成果を加味しつつ、個別遺構の具体・詳細を再整理し、変遷の傾向について検証・修正を行いながら検討を継続したいと思います。

■展覧会案内

# テーマ展「中世の南部氏と糠部」

会期：平成29年9月23日（土）～11月26日（日）　会場：特別展示室

## 1　はじめに

当館では今秋、テーマ展「中世の南部氏と糠部」を開催します。本稿では展示の概要と主要な展示資料についてご紹介したいと思います。

さて、中世とはおよそ平安時代末期から戦国時代までを指しますが、この展覧会では中世の南部氏に関する諸資料の展示を通し、中世の諸相、当該期の南部氏や、糠部と称された岩手県北部から青森県東部の地域の歴史に関心を持っていただく端緒になればと考え、企画しました。

ところで、歴史研究で最も重視されるのは古文書や出土遺物などのいわゆる同時代資料です。中世の南部氏は大きく二系統からなっており、一方の根城南部氏（近世の遠野南部氏）には多くの貴重な古文書が伝存しています。今回はその影写本（＝精巧な複製、八戸市博物館所蔵）をお借りして展示する予定です。

他方、三戸南部氏（近世の盛岡藩主南部氏）には中世文書がほとんど伝存せず、そのことが研究を難しくしてきた面は否めません。しかし後述する通り、近年は三戸南部氏の居城・聖寿寺館跡（青森県南部町）の発掘調査が進められ、様々なことが解明されつつあります。今回は南部町教育委員会から数々の遺物をお借りして展示する機会が得られました。これらは県内初公開のものです。ぜひ皆様にも直接ご覧いただきたいと思います。

また、同時代資料に比べて資料的価値は劣りますが、近世の編纂資料に関しても見るべき点はあります。仮に潤色があるにせよ、どの部分が虚構で、編纂者がどういう意図でそれを記述したのか、背景にはどのような歴史観があるのか、などを追究することも、大事な歴史研究の一部だと私は考えます。今回の展示でも、皆様にその一端を感じていただければ幸いです。

## 2　糠部という地域

「糠部」という地名の史料上の初見は、鎌倉幕府の歴史書『東鑑（吾妻鏡）』文治５年（1189）９月17日条所載、中尊寺衆徒らの「寺塔已下注文」です。この中には平泉藤原氏２代目の基衡が毛越寺建立にあたって仏師雲慶に与えた「功物」の中に「糠部駿馬五十疋」があったという記述が含まれており、ここから馬産地としての糠部という地域像がみてとれます。

写真１：東鑑

一方「糠部郡」の初見史料は、寛元４年（1246）の「北条時頼下文」（常陸宇都宮文書、『鎌倉遺文』所収）です。この文書は展示資料に含みませんが、注目すべき内容を含むので簡単にご紹介します。これは、鎌倉幕府５代執権時頼が陸奥国糠部郡五戸（現在の青森県五戸町）の地頭代に平盛時を任命した際の文書です。地頭代は地頭の代官で、通常は地頭自身が任命します。平盛時は北条得宗家（北条氏の嫡流）に仕える被官、いわゆる御内人としてその名を知られています。つまりこの文書からは、時頼が生きた13世紀半ば時点で既に糠部郡（の一部）が北条得宗家領だったこと、時頼は自分の配下の盛時に五戸の支配を代行させたこと、の二点がわかるのです。

これより後、14世紀前半に鎌倉幕府が滅亡して建武の新政が始まると、陸奥国（現在の青森・岩手・宮城・福島の四県）では陸奥守北畠顕家が政務を行うようになります。この頃、旧幕府方とみられる武士たちから没収された所領が、後醍醐天皇方で戦功をあげた者たちに与えられます。この際、その実務を任せられた人物の中に南部師行（根城南部氏４代当主）の名がみえます。これが、糠部と南部氏の接点が明確に同時代資料上に現れる、比較的古い事例です。

## 3　南部氏の発祥と展開

### ①発祥

南部氏は八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光を祖とする甲斐源氏の一族です。義光は後三年合戦の際、苦戦する兄義家を助けるために官職を辞して都から奥州へ駆けつけたことや、笙の名手としても知られています。また、後年その子孫にあたる南部氏が根付いた糠部の地には、義光を祭る「新羅神社」が複数存在します。

写真２：後三年合戦絵巻

写真３：新羅神社（南部町）

義光の後、子の義清、孫の清光は当初常陸国（現在の茨城県）に居住していましたが、現地の豪族と抗争に及び、朝廷から処罰される形で甲斐国（現在の山梨県）へと移ります。さらに清光の子（あるいは弟）の加賀美遠光は、源頼朝に従い数々の軍功を立て、一族は甲斐

国、信濃国（現在の長野県）で繁栄しました。この遠光の三男が光行で、甲斐国南部郷（山梨県南部町）を領有し、この地を名字の地とする南部氏の歴史がここに始まったと言われています。

初代光行、２代実光、３代時実の動向は、前出の『東鑑（吾妻鏡）』の中にも記述があります。それらからわかることは、彼らの名が将軍家随兵として度々登場すること、弘長元年（1261）及び弘長３年（1263）条にみえる実光・時実は、５代執権北条時頼の側近的な存在として描かれていることの二点です。つまり南部氏は鎌倉幕府に仕える御家人であると同時に、御内人（的な）存在だったとみるのが妥当だと考えられます。

②南北朝時代の南部氏

鎌倉後期以降、資料上に南部氏の名を確認するのは難しくなりますが、次の南北朝時代、殊に冒頭の建武政権下では、南部時長・師行・政長の三兄弟が台頭します。彼らは、初代光行の子実長の系統（根城南部氏）に属し、光行の二男実光を祖とする三戸南部氏とは別系統です。

このうち師行は陸奥守北畠顕家から北奥の奉行（国代）に抜擢され、糠部郡八戸の根城（現在の青森県八戸市）に拠って、南部氏の基盤を確立します。彼らは南朝方に属して勢力を拡大しました。

また、正平21年（1366）８月15日付「四戸八幡宮神役注文案」（南部家文書）という資料が存在します。これは糠部郡の四戸八幡宮（櫛引八幡宮）で行われる「放生会」での様々な役を全郡に配分した文書です。この文書で注目すべきは、全郡に指示をするだけの実力を有する差出人「大膳権大夫」の存在です。この差出人は、官途名からみて三戸南部氏13代当主守行とみなす説が存在します。この見立てに立脚すれば、この時までに三戸南部氏が根城南部氏に代わり一門の中心的地位を占めていたということになりますが、これは推測に依拠した見解になってしまうため、今後とも検討を重ねていく必要があると思われます。

③長胴太鼓の墨書銘

ここで長胴太鼓（天台寺蔵）という貴重な資料をご紹介します。

写真４：長胴太鼓（天台寺蔵）

この太鼓は鎌倉時代後期から南北朝時代初期に製作されたと推測されるもので、天台寺（岩手県二戸市）に所蔵されてきました。胴部の内側には６種類の墨書銘が残されており、残念ながら最も古い銘文（造立銘）は削り取られています。それ以外の墨書銘は張り替え時のもので、元中９年（1392）に修理を行ったことがわかります。

当時は南北朝時代で、南朝・北朝各々が異なる元号を用いていました。この「元中」は南朝元号であることから、当地の支配者は南朝方に属していた可能性が想定されます。但しそれが三戸南部氏であったか否かは、さらなる検討を要します。

④室町時代の三戸南部氏と聖寿寺館

同時代の文献資料上で三戸南部氏の名を探ると、例えば『看聞日記』（伏見宮貞成親王の日記）応永25年（1418）８月10日条に「関東大名南部上洛、馬百疋、金千両室町殿へ献之云々」とあります。この資料も展示は行いませんが、重要なものなのでここでご説明します。

本文中の「関東」とは本来、いわゆる関東地方を指す語ですが、当時は室町幕府の出先機関として関東に鎌倉府が置かれており、その管轄区域には東北地方も含まれます。この点を勘案すると、これは陸奥国の大名である南部氏（時期的には三戸南部氏13代守行）が上洛し、馬や金を４代将軍足利義持に献上したと考えることが可能です。

ところで、三戸南部氏は金や馬を将軍へ献上するだけの実力を本当に備えていたのでしょうか。

その答えは、三戸南部氏の居館・聖寿寺館跡の出土遺物によって導き出されます。金箔土器、陶磁器といった、政治力や経済力を反映した、いわゆる「威信材」が多く出土していること、城館の規模の大きさなどからみて、三戸南部氏は東北地方有数の勢力を誇る武家であったことが明らかにされつつあります。

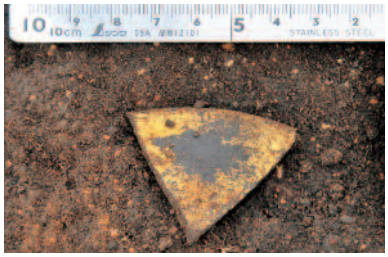


写真５：金箔土器

## ４　おわりに

聖寿寺館は、三戸南部氏24代晴政の時、家臣の放火で焼亡したと伝えられています。その後三戸南部氏は居城を三戸城（青森県三戸町）、九戸合戦の終結後には福岡城（修築された九戸城、岩手県二戸市）、さらに盛岡城と移し、近世の盛岡藩主南部氏としての新しい歴史が始まりました。

尚、ここで言及しなかったものも含め、本テーマ展では中世の南部氏や糠部に関連する様々な資料を展示します。前述の通り県内初公開の資料もございます。ぜひご来館の上、ご覧ください。

（専門学芸員　佐々木康裕）

■事業報告

# ゴールデンウィークスペシャルイベント

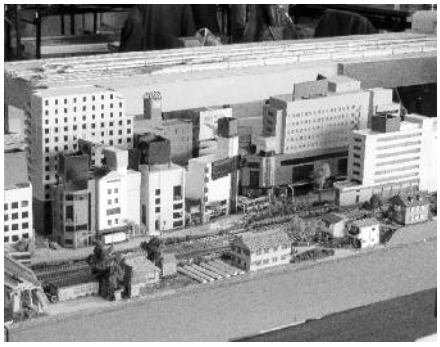
テーマ展「絵画に見る19世紀岩手の風景」関連事業

テーマ展「絵画に見る19世紀岩手の風景」は、激動の時代であった19世紀の風景を絵画や写真を通じて紹介する内容でした。19世紀のうち、前半の約70年間が江戸時代、後半30年間は明治時代と区分できます。この２つの時代を比較した時、風景に大きな変化をもたらしたのは、鉄道の存在でした。日本鉄道会社線の上野－青森間（後の東北本線）が開通し、線路を汽車が走るという新たな風景が誕生しました。この展覧会では、岩手県にゆかりのある画家・川口月村が日本鉄道会社の依頼を受けて描いた絵画を通じて、一関から青森に至る沿線の風景を紹介しました。本展覧会では、資料の展示だけではなく、19世紀の雰囲気を伝える明治時代の衣装体験や、懐かしい盛岡の風景を記録したフィルムの上映、そして岩手の風景を一変させた鉄道関連のイベントを通じて、子どもから大人まで楽しめる内容を企画いたしました。以下、当日の様子をレポートいたします。

4月29日（土）、30日（日）に行われた「明治気分で大変身！」は、明治時代風のドレスやフロックコート、女学生の制服を着て変身し、明治時代の気分を味わうものです。このイベントで使用されたドレスと女学生の制服は、岩手県立平舘高等学校との共同プロジェクトで制作されたものです。当日は９種類の衣装が揃いました。実際にドレスを着用した児童は、現在の着心地との違いに驚きながらも、明治時代の気分をしっかりと味わっていました。

５月４日（木）・５日（金）は、鉄道関係のイベントが開催されました。「ミニＳＬに乗って出発進行！」では、芝生広場に線路が設置されました。IGRいわて銀河鉄道株式会社の御協力で運行されたSLは、サイズは小さいものの、本物のそのままに、石炭を燃やすことで力強く走りました。汽笛を鳴らすミニＳＬに、乗車した子どもたちは大興奮でした。２日間とも夏のような晴天に恵まれ、中には何度も乗る子どももおり、大盛況でした。

同じく５月４日（木）・５日（金）の２日間にわたって行われた「走れ！蒸気機関車&新幹線」は、岩手県内の鉄道模型愛好者団体である、岩手鉄道模型仲間の会の御協力を得て開催された、鉄道模型のイベントです。モジュールと呼ばれる、箱型のテーブルの上に、線路や建物が置かれ、線路周辺の風景が見事に再現されています。このモジュール同士をつなげて、大きなロの字型のコースが出来ました。鉄道模型はこのモジュール上の線路の上を走るのです。一つ一つのモジュールには様々な風景が再現されています。雪景色もあれば、日本の田園風景や都市部の駅前の風景、そして鉱山の様子まで再現されるなど、一日中見ていても飽きない風景がたくさんありました。当日は、来館者が所有している車両を走らせることも出来たため、多くの家族や愛好者でにぎわいました。中には、新幹線の点検用車両であるドクターイエローが走ったほか、鉄道模型の車両内に小型のカメラを積み、車窓の景色がモニターに映し出されるコーナーが設置されるなど、子どもから大人まで夢中になって、鉄道模型が走る様子を見つめていました。



最後に、５月６日（金）に行われたミュージアムシアターについて紹介いたします。これは、「岩手の輝き Light of Iwate」という記録映画で、大正12年（1923）の盛岡の様子を記録したものです。当時の映画は、音声の聞こえない無声映画でしたので、映画のストーリーを観客に語り伝える「弁士」が欠かせません。今回は、元盛岡劇場館長の太田幸夫さんの解説で上映いたしました。多くの方に100年近く前の盛岡の風景を楽しんでいただきました。今後とも、岩手県立博物館では、多くの方々に喜んでいただけるイベントを開催し、当館の魅力を積極的に発信できる場を作りたいと考えております。

（専門学芸調査員　原田祐参）

■事業報告

# 県博バックヤードツアー

平成29年度「国際博物館の日」関連事業

平成29年５月21日（日）に岩手県立博物館では、平成29年度「国際博物館の日」関連事業として、「県博バックヤードツアー」を開催しました。

「国際博物館の日」とは、博物館が社会に果たす役割を広く普及・啓発することを目的として1977年にICOM（International Council of Museums；国際博物館会議。「イコム」もしくは「アイコム」と呼ばれ、世界の博物館関係者で組織される国際会議）によって制定されました。当館を含め、この活動に賛同する世界中の博物館では、５月18日を中心として、無料開館や特別講演会、地域連携事業の実施といった様々な記念行事が行われております。

当館では国際博物館の日記念事業の一環として、平成18年度より「県博バックヤードツアー」を開催しております。博物館のバックヤードは厳密な温湿度管理や防犯態勢が必要となるため、通常は職員以外の立ち入りを禁止しております。しかし博物館の普及啓発を目的とした国際博物館の日に限り、普段は立ち入ることができない当館の収蔵庫等の設備を特別に見学してもらい、表からは見えない博物館の資料収集保存活動を知ってもらうことを目的として当事業を開催し、今年度で12回目の実施となりました。

今年度のバックヤードツアーでは、「文化財レスキューコース」「自然史コース」「歴史コース」の３つのコースを設け、それぞれ事前に御予約いただいた参加者の皆様に、希望するコースを60～80分ほどで周っていただきました。

図１．文化財レスキューコースの様子

図２．自然史コースの様子

図３．歴史コースの様子

午前と午後の２回行った「文化財レスキューコース」では、被災した文化財がどのように当館に搬入され、どのような経緯を経て安定化処理がなされるのかを見学してもらいました。津波によって被災した資料は海水に浸かってしまっているため、まず塩分を抜くための脱塩処理から始まり、最終的に人の手によって一点一点、地道な作業を経て安定化がなされることを初めて知り、驚かれた方もいらっしゃったようです。施設の見学の後には、当館学芸員の立ち会いのもとで参加者の方にも実際に資料の安定化処理に加わっていただきました（図1）。最初は一様に緊張した面持ちで作業をされておりましたが、徐々にコツをつかむと、最後には立派に作業を完了されていました。

午前に行った「自然史コース」では、生物部門と地質部門の収蔵庫を中心に見学をしました。生物部門の収蔵庫では、大量の動物の剥製標本や昆虫標本、植物の押し葉標本、魚類の液浸標本等の観察をしました。参加者の方々は今にも動き出しそうな生き生きとした剥製標本をじっくりと観察されておりました（図2）。また、地質部門の収蔵庫では、当館に所蔵されている岩石や化石標本の観察を行いました。収蔵棚に収められているたくさんの木箱にはどのような標本が収納されているのか、ひとつひとつ引き出して興味深く観察される姿が見られました。

午後に行った「歴史コース」では、考古、民俗、歴史部門の収蔵庫を周りました。考古部門の収蔵庫では、当館に所蔵している土器や石器標本の見学を行いました。大昔の岩手の人々が使っていた道具を、展示室よりもずっと間近で見ることができ、満足されていたようでした。また、民俗部門の収蔵庫では時代がぐっと新しくなり、近代の道具を観察しました。中にはまだ実際に稼働する昭和時代のソノシートと再生機器があり、当時の音を再生してみました。参加者の中には、懐かしさを感じ、当時のことを思い出した方もいらっしゃったようです。最後に歴史部門の収蔵庫では、大きな絵画や刀の収蔵方法等について見ていただきました。刀は刃と柄の部分を別々に分けて収蔵、保管するといった意外な事実を知ることができました。

参加者の方々はバックヤードツアーを通じて、展示室に展示されている標本が登録されている資料のほんの一部であることを実感され、とても驚かれていたようでした。岩手県立博物館では、来年度以降もこのような活動を継続して行っていきたいと考えております。

（学芸員　望月貴史）

# 岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

## インフォメーション 〈2017.9.1～2017.12.31〉

### お知らせ

**●資料整理に伴う休館**
平成29年９月１日(金)～平成29年９月10日(日)は資料整理のため休館します。※翌11日(月)は通常休館日です。

**●敬老の日 65歳以上入館無料**
平成29年９月18日(月・敬老の日)は、65歳以上の方は無料で入館できます。

### 展 覧 会

**●テーマ展「中世の南部氏と糠部」**
**平成29年９月23日(土)～平成29年11月26日(日)　２階　特別展示室**
貴重な資料を基に知られざる中世の南部氏、「糠部」と呼ばれた岩手県北部・青森県東部の歴史像に迫ります
※詳細はp.4-5展覧会案内記事をご覧ください。
**◆展示解説会(中学生～一般向け)**　14：30～15：00 大人は要入館料
10月14日(土)、11月３日(金・祝)
**◆県博日曜講座「中世の南部氏と糠部について考える」**
講堂　当日受付　聴講無料
平成29年10月８日(日)13：30～15：00:
佐々木康裕(当館学芸員)
※下記「県博日曜講座」の欄もご覧ください。

### 文化講演会

**11月５日(日)13：30～16：30(予定)　講堂　当日受付　聴講無料**
「iPS細胞と再生医療」　再生医療の現状や最新の研究成果など
講師　青井貴之氏(神戸大学大学院医学研究科教授)
八代嘉美氏(京都大学iPS細胞研究所特定准教授)

### 県博日曜講座

**第２・第4日曜日　13：30～15：00　当日受付　聴講無料**
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
＊展覧会関連講座
９月24日「岩手の災害と歴史」
小田桐睦弥 氏(花巻市博物館学芸員)
＊10月８日「中世の南部氏と糠部について考える」
佐々木康裕(当館学芸員)
10月22日「発掘された岩手の中世城館」　小山内透(当館学芸課長)
＊11月12日「三戸南部氏成立の謎
―掘り起こされた南部氏の居城「聖寿寺館跡」―」
布施和洋 氏(南部町教育委員会社会教育課史跡対策室総括主査)
11月26日「岩手の鳥相を語る～ネイチャーセンターとり日誌～」
藤井忠志(当館学芸員)、
齊藤友彦 氏(滝沢森林公園ネイチャーセンター所長)
12月10日「ドラゴンアイ(八幡平・鏡沼)のでき方を考える」
山岸千人(当館学芸員)
12月24日「岩手の往来」　薗田貴弘(当館学芸員)

### 観察会(事前申込制)

**第74回地質観察会「平泉～泉の仕組みを読み解く～」**
**平成29年10月８日(日)10：00～15：00**
**於、平泉周辺　現地集合・解散**
平泉の西に広がる磐井丘陵の地質構造を観察し、地層ができた環境や湧水ができる仕組みについて考えます。
講師：大石雅之 氏(当館研究協力員)
定員：20名　参加費：100円(傷害保険料)
募集期間：9月14日(木)～21日(木)　定員充足しだい締切

観察会の申込み方法：往復はがきまたは電子メールで受け付けます。
詳細はお問い合わせください。

### 博物館まつり

**第９回岩手県立博物館まつり・第39回盛岡矯正展**
**ータッグフェスタin松園ー**
**平成29年10月１日(日)　9：00(開門)～16：00**
体験コーナー　整理券配布は午前の部　９：10～
午後の部　12：45～
各体験コーナー開始は９：30～
この日だけの特別なイベントがもりだくさんの1日！

### 週末の催し

**◆ミュージアムシアター**　※9月はお休みします。
**毎月第１土曜日　13：30～15：00頃**
**講堂　当日受付　視聴無料**
10月７日　「晩春」(108分／一般)
父と娘の感動物語。笠智衆、原節子競演。1949年のモノクロ映画
11月４日　「大いなる旅路」(95分／一般)
鉄道とともに生きた一家の激動の30年間。三国連太郎主演作品
12月2日　クリスマスアニメ特集
「クリスマスキャロル」(29分／幼児～一般)
けちん坊お爺さんに訪れたクリスマスの奇跡とは・・・
「チップとデール　リスの山小屋合戦」(８話56分／幼児～一般)
チップとデールは冬の支度に大忙し！ハプニングも続出！

**◆チャレンジ！はくぶつかん**
**毎月第２・第３土曜、日曜、祝日　小学生向け　随時受付**
チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！
９月16日・17日・18日・23日・24日　テーマ：長い
10月14日・15日・21日・22日　テーマ：南
11月11日・12日・18日・19日　テーマ：七・五・三
12月９日・10日・16日・17日　テーマ：大

**◆たいけん教室～みんなでためそう～(事前申込制)**
**毎週日曜日　13：00～14：30**
**幼児(保護者同伴)・小学生20名程度**
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※４月から全プログラム有料となりました(材料費代／プログラムごとに異なります)。
※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9：30～16：30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に３名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 9月 | 3日　お休み<br>10日　お休み<br>17日　まが玉アクセサリー<br>24日　手づくり万華鏡 | 11月 | 5日　化石のレプリカ<br>12日　手づくり万華鏡<br>19日　松ぼっくりのXmasツリー<br>26日　松ぼっくりのXmasツリー |
| 10月 | 1日　はくぶつかんまつり<br>8日　石のオリジナルはんこ<br>15日　ウォータードームづくり<br>22日　葉っぱのカラフルカード<br>29日　砂絵 | 12月 | 3日　松ぼっくりのXmasツリー<br>10日　まゆで干支(戌)づくり<br>17日　松ぼっくりの正月かざり<br>23日　冬のわくわくワークショップ<br>24日　まゆで干支(戌)づくり |

### 冬のワクワク！ワークショップ

**平成29年12月23日(土・祝)**
**受付時間　9：45～11：30／13：00～15：00**
当日受付(予約不要・材料費各100円)
※混雑時は待つことがあります。
「アンモナイト」か「恐竜の歯」、どちらか選んで工作しよう。
(各先着50名)所要時間：約35分
対象：幼児(保護者同伴)～小学生

### 第２回ミュージアムコンサート

**12月23日(土)13：30～14：30　講堂　当日受付　視聴無料**
親子で楽しめるクリスマスコンサート！

### 定時解説

**平日～土曜日　13：30～14：30／日曜日10：30～11：30**
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご希望におこたえしています。
※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

### 平成29年度の利用案内

■開館時間　9：30～16：30(入館は16：00まで)
■休 館 日　月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※９月18日(月・敬老の日)、10月9日(月・体育の日)は臨時開館
資料整理日(９月１日～９月10日)
年末年始(12月29日～１月３日)
■入 館 料　一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金
※ ９月18日(月・敬老の日)は65歳以上の方無料
※11月３日(木・文化の日)は無料
※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。


| | |
|---|---|
| 岩手県立博物館だより<br>第154号<br>平成29年9月1日発行 | 編集　岩手県立博物館<br>〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34<br>Tel. (019)661-2831／Fax. (019)665-1214<br>発行　公益財団法人岩手県文化振興事業団<br>〒020-0023 盛岡市内丸13-1<br>Tel. (019)654-2235／Fax. (019)625-3595 |